

※参考資料の一部

トピック	資料名	作者	発行年数	発行元
文房堂	大正大震災震害及火害之研究	宮緒管財局編	1925	洪洋社
文房堂	設備年鑑 第7巻1970年版		1970	学窓社
文房堂	中也と中野と中央線(中野区ゆかりの著作者紹介展示 中野区立中央図書館)		2019	中野区立中央図書館
文房堂	金四郎三代記: 谷中人物叢話	浅尾丁策	1986.7	芸術新聞社
文房堂	中央大学(大学シリーズ)		1971	毎日新聞社
文房堂	神田写真集	タウン誌"神田っ子"十	1982.10	久保金司
文房堂	殖やす秘訣・貯める秘訣(知的生きかた文庫)	富子勝久	1987.1	三笠書房
文房堂	日経研月報 2月(260)		2000	日本経済研究所
文房堂	神田人物誌	桑原萍水 編	1916	神田公論社
文房堂	帝国現代縦横史: 御即位礼記念	時代研究会 編	1918	時代研究会出版部
文房堂	第52回 株式会社文房堂(ぶんぼうどう)		2020 2.5	神田学会
文房堂	千代田区景観まちづくり重要物件		2003(平成15)年6月	
文房堂	文房堂発売品目録		1914	文房堂
文房堂	実業の日本27(23)		1924	実業の日本社
文房堂	商店界 13(3)		1933	誠文堂新光社

図 2.1.7 東明館に関する資料(一部)

東明館	神保町が好きだ! 第13号	八木壯一	2019.10	本の街・神保町を元気にする会
東明館	東京路上細見 1(湯島・本郷・根津・千駄木・神田)	林順信	1987.7	平凡社
東明館	東京市統計年表	東京市役所編	1903	
東明館	新編千代田区史	東京都千代田区	1998	東京都千代田区
東明館	明治のショッピングセンター勸工場	田中政治	2009	田中経営研究所
東明館	日本皮革商工人名録	浅利新	1910-1911	日本皮革時報社
東明館	東京地名案内: いろは別	村田峰次郎	1908	晩成社
東明館	漢訳東京指南	村田春江	1906	参文舎
東明館	豊太閤	橘隆友	1898	右田商店
東明館	捨てたる恋: 家庭小説	草の人	1907	大学館
東明館	最新東京案内記 春の巻	東都沿革調査会	1898	教育舎
東明館	東京写真帖	博文館	1914	
東明館	英語受験準備 問題之部	花輪虎太郎	1909	嵩山房
東明館	東京遊學案内 上篇 第13版	少年園	1898	
東明館	東京案内	森集画堂編輯部 編	1909	森集画堂
東明館	文房堂年表	文房堂	1910	文房堂

図 2.1.8 文房堂に関する資料(一部)

## 第2節 疑似的帰宅困難者体験を通じた防災教育に関する成果と課題

伊藤 マモル（法政大学 法学部）

### 1 緒言

近年、大規模自然災害の頻発化・激甚化は、社会の脆弱性を露呈させ、個人の生命、財産、そして地域社会の存続そのものを脅かしている。特に都市部においては、災害発生直後の交通機関の麻痺によって多数の帰宅困難者が発生し、混乱や二次災害のリスクを高めることが懸念される。このような状況下において、地域社会の一員として、また将来を担う人材として、大学生が災害時に適切な行動をとり、主体的に地域社会に貢献できる能力を育成することは、喫緊の課題であると言える。

法政大学市ヶ谷キャンパスは、東京都の「地区内残留地区」に指定されており、千代田区と締結した防災協定に基づき、地域住民や一般の一時帰宅困難者を受け入れる役割を担っている。しかし、予測困難な事態が多発する災害時において、大学がその役割を十分に果たすためには、ハード面の整備に加えて、ソフト面、すなわち教職員や学生といった構成員の防災意識の向上と、実践的な対応能力の育成が不可欠である。さらに重要なことは、災害は誰にでも起こりうる、つまり学生自身も被災者となりうるという視点を持つことである。

こうした背景を踏まえ、法政大学では、2020年度より「課題解決型フィールドワーク」を開講し、大規模自然災害発生時における帰宅困難者支援をテーマに、課題解決型学習に取り組んできた。2024年度からは、社会連携フィールドワーク（ベーシック）に科目名が変更された。本授業では、単に知識を習得するだけでなく、疑似帰宅困難者体験（宿泊や事前の知識確認、宿泊体験、EV車を用いた調理実習、ロールプレイング、KUGといった活動を含む）を中心とした体験型学習を取り入れることで、学生が災害時における自身の安全確保と、他者への貢献という両面から防災について学ぶことを目指している。



ロールプレイング① 事前相談（帰宅困難者受付係役：屋外班と校舎内班に分かれて）



ロールプレイング②（校舎内への一時避難者の受入れ）／受付・誘導係（赤のビブス着用者）



ロールプレイング③ 体育館前（屋外）での一時避難者の受入れ・誘導



消灯後、教室での就寝状況



AEDを用いた救命救急実習



電気自動車（協力：日産自動車）からの給電による調理実習（調理指導：東京家政学院大学・酒井セミ）

この授業の根幹にあるのは、知識の詰め込み型教育からの脱却と、学生が主体的に学び、行動する姿勢を育むことにある。過去の授業では、例えば、災害時にどのような情報が重要になるのか、どのような行動をとることが適切なのか、といった具体的な問題に対して、学生自身が考え、議論し、解決策を探るプロセスを重視してきた。また、過去の授業の成果を検証した結果、学生は講義や演習を通して災害に関する知識を深め、防災意識を高めるだけでなく、他者と協力しながら課題を解決する能力や、共感性といった人間性も育まれていることが示唆されている。さらに、本授業の経験が、卒業後の地域社会における防災活動への参加や、災害関連の仕事に就くといった、具体的な行動につながる可能性も示唆されている。

本研究では、単に知識の習得だけでなく、実践的なスキルの習得、共感性や倫理観の醸成、地域社会への貢献意欲の向上といった、多角的な視点からプログラムの効果を評価することで、大学生に対する防災教育のあり方に関する新たな知見を提供することを目指す。特に、本学が位置する千代田区という地域特性を踏まえ、大学が地域社会の一員として、災害時に果たすべき役割を明確化し、そのための具体的な教育プログラムを提案することを目指す。

## 2 目的

本研究は、大学生を対象とした社会連携型防災教育プログラムが、大規模自然災害発生時またはその後に、学生ボランティアとして地域社会に貢献する意欲と能力を育成するかどうかを検証する。具体的には、疑似帰宅困難者体験を中心としたプログラムが、学生の防災意識、知識、実践的な行動力、および共感性や倫理観といった自己認識能力に与える影響を評価する。アンケート調査結果を分析することで、本プログラムが学生ボランティア育成に果たす役割を明らかにし、今後の防災教育のあり方に関する示唆を得ることを目的とする。

## 3 方法

### 1) 調査対象

2024 年度に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて開講された社会連携フィールドワーク・プロジェクト（以下、PBL と略す）を履修した学生 55 名を対象とした。PBL は、大妻女子大学・大妻女子大学短期大学部、共立女子大学・共立女子短期大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、法政大学、専修大学から成る千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（以下、千代田コンソ大学と略す）の単位互換科目となっており、履修者 55 名の内訳は、共立女子大学 1 名、大妻女子大学 1 名、法政大学 53 名であった。

### 2) データ収集

本研究では、以下の三つのセクションに分けて授業の前後でデータの収集を実施した。

（1）授業後に実施した設問のうち、授業を受ける前の認識に関する質問として、以下の 1～4 を設定した。回答は、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」から 1 つ選ばせた。

- 1: この授業を受ける前に、法政大学・大妻女子大学・共立女子大学・東京家政学院大学・二松学舎大学・専修大学などの千代田コンソ大学が、千代田区における一時帰宅困難者の受け入れ施設であることを知っていましたか？

2: この授業を受ける前に、一般の帰宅困難者のための備蓄品が法政大学市ヶ谷キャンパス内や、千代田コンソの各大学のキャンパス内に保管されていることを知っていましたか？

3: この授業を受ける前に、帰宅困難となった学生のための備蓄品が、千代田コンソ大学の各キャンパス内に保管されていることを知っていましたか？

4: 千代田コンソ大学のキャンパス内に保管されている備蓄品倉庫の場所の所在を、各大学の全学生が知っておくべきだと思いますか？

(2) 授業を受けた後の大規模自然災害に関する意識や行動の変容に関する質問として、以下の5～18を設定した。5、7～16、および18の回答は、「全くそう思わない」を最下位に、最上位を「強くそう思う」とした1～5点の範囲で、自分の気持ちに最も近い点数を1つ選ばせた。6および17は自由に記述させた。

5: この授業を受ける前と比べて、災害時に大学内で落ち着いて行動する、あるいは滞留することができるようになったと思いますか？

6: 「5」の理由を自由に書いてください。

7: この授業を受けたことで、帰宅困難者支援が必要となった場合、千代田コンソ大学の各々の災害ボランティア学生として協力できるようになったと思いますか？

8: 大学の防災対策や帰宅困難者受け入れ施設の運営に関する問題の解決に本授業は役立つと思いますか。

9: あなたは千代田コンソの各大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生にとって、KUGは有意義な教材だと思いましたか？

10: 帰宅困難者施設運営ゲーム（以下、KUGと略す）を千代田コンソ大学の教職員や学生に薦めたいと思いますか？

11: 災害時に学生ボランティアとして参加できますか？

12: 避難所における健康の維持（ストレスや睡眠など）について、その興味や関心は高まりましたか？

13: 避難所での栄養や食事（調理方法や備蓄品など）について、その興味や関心が高まりましたか？

14: 災害や防災に関して、さらに学ぶ意欲が強まりましたか？

15: この授業で学んだことを家族や友人と共有しようと思いますか？（あるいは、共有しましたか？）。

16: この授業を受けて、外出時の持ち物が変わりましたか？

17: 持ち歩くようになった物は何ですか？

18: 災害や防災に関する教養科目があればさらに履修して学びたいと思いますか？

(3) 授業の前後に行ったアンケートにおいて、授業への履修動機、履修者の防災意識、知識、行動意欲、自己認識能力に関する自己評価および授業内容に関する感想や意見、今後の展望などの回答を収集した。授業の前後で実施した設問は、「次の力（チカラ）について、あなたは現在どの程度持っていると思いますか。」であり、以下の①～⑫について、最もあてはまる気持ちとして、「まったくない」、「あまりない」、「どちらとも言えない」、「ややある」、「十分にある」から1

つ選ばせた。

- ① 物事に進んで取り組む力
- ② 他人に働きかけ巻き込む力
- ③ 目的を設定し確実に行動する力
- ④ 現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- ⑤ 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
- ⑥ 新しい価値を生み出す力
- ⑦ 自分の意見をわかりやすく伝える力
- ⑧ 相手の意見を丁寧に聴く力
- ⑨ 意見の違いや立場の違いを理解する力
- ⑩ 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
- ⑪ 社会のルールや人との約束を守る力
- ⑫ ストレスの発生源に対応する力

### 3) データ分析

収集した回答の分布状況をグラフに可視化するとともに、アンケートの内容を質的な定性分析を行った。授業の前後で実施した①～⑫については、回答数および割合（％）を授業前・授業後で比較し、特に、授業後に肯定的な回答（「十分にある」「ややある」）が増加した項目に着目し、学生ボランティアとして活動するために重要な自己認識能力との関連性を考察した。

### 4) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、以下の倫理的配慮を行った。

履修者に対して、研究の目的、方法、および個人情報の取り扱いについて、口頭および書面で丁寧に説明し、履修者の自由意思による同意を得るとともに承諾書を受取った。個人情報の保護に関しては、収集した個人情報は厳重に管理し、匿名性の確保し、分析結果を公表する際は、個人が特定されないよう配慮するとともに、研究目的以外には一切使用しないことを十分に説明し、同意を得た。また、アンケートの回答は任意であり、いつでも自由に辞退できることを保証した。

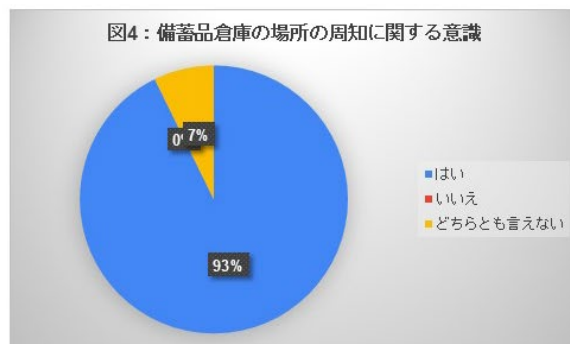
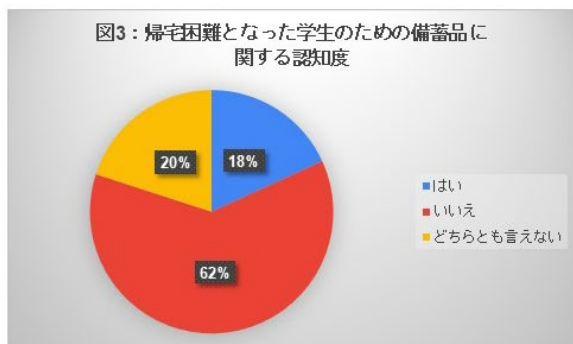
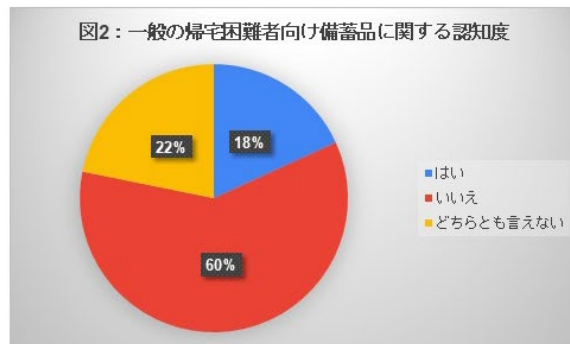
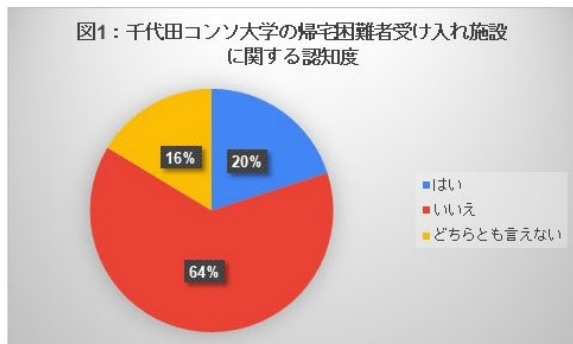
## 4 結果および考察

PBL には、55 名の研究対象者以外に、聴講参加した専修大学ボランティアサークル所属学生 5 名（宿泊体験を除くプログラムに参加）、高大連携プログラムに参加した高校生 10 名（KUG にのみ参加）、東京家政学院大学酒井ゼミ生 8 名（電気自動車を用いた屋外調理実習のみに参加）の計 23 名も参加していたが、アンケート対象とはしなかった。

### 1) 授業を受ける前の認識

質問 1～4 の回答結果を図 1～4 に示した。

図1の「千代田コンソ大学の帰宅困難者受け入れ施設としての認知度」では、千代田コンソ大学が帰宅困難者の受け入れ施設であることを知っていた学生はわずか 20.0%に留まった。63.6%



の学生が「いいえ」と回答し、16.4%が「どちらとも言えない」と回答していることから、その役割の認知度が低いことが明らかになった。

図2の「一般の帰宅困難者向け備蓄品に関する認知度」では、千代田コンソ大学のキャンパス内に一般の帰宅困難者向け備蓄品が保管されていることを知っていた学生は 18.2%に過ぎず、60.0%の学生が「いいえ」、21.8%の学生が「どちらとも言えない」と回答した。この結果は、大学が帰宅困難者支援施設としての役割を担っているにも関わらず、学生への周知が十分ではないことを示唆している。

図3の「帰宅困難となった学生のための備蓄品に関する認知度」では、帰宅困難となった学生のための備蓄品が千代田コンソ大学のキャンパス内に保管されていることを知っていた学生は 18.2%であり、61.8%の学生が「いいえ」、20.0%の学生が「どちらとも言えない」と回答した。この結果は、図2と同様な問題を示唆している。

図4の「備蓄品倉庫の場所の周知に関する意識」では、千代田コンソ大学のキャンパス内に保管されている備蓄品倉庫の場所の所在を、各大学の全学生が知っておくべきであると 92.7%の学生が考えていることが明らかになった。「いいえ」と回答した学生は 0人であり、「どちらとも言えない」と回答した学生も 7.3%に留まった。この結果は、多くの学生が備蓄品倉庫の場所を周知することの重要性を認識していることを示している。

以上の結果から、学生が大学を帰宅困難者の受け入れ施設として認識し、備蓄品の存在や保管場所を把握させることの重要性が示された。大学が避難場所として機能することを理解すること



で、学生は主体的に行動し、ボランティア活動への意識が高まる。備蓄品の存在を認識することで、大学職員や他のボランティアとの連携が円滑になり、迅速かつ適切な物資提供が可能となり、避難所運営の効率化にも貢献できる。また、学生自身が被災者となる可能性を踏まえると、備蓄品が確保されていることを知ることで不安が軽減し、ボランティアとして、一般帰宅困難者への支援意欲も高まり、適切な情報提供等の支援の質を向上させる可能性が期待される。大学の防災機能を学生が理解し、備蓄品の管理や活用について学ぶことが、学生ボランティア育成において重要であることが示された。

## 2) 授業を受けた後の大規模自然災害に関する意識や行動の変容

質問 5 は、7～16、および 18 の回答を、図 5～16 に示した。質問 6 の回答は、図 5 と合わせて考察した。質問 17 は、図 17 に示した。

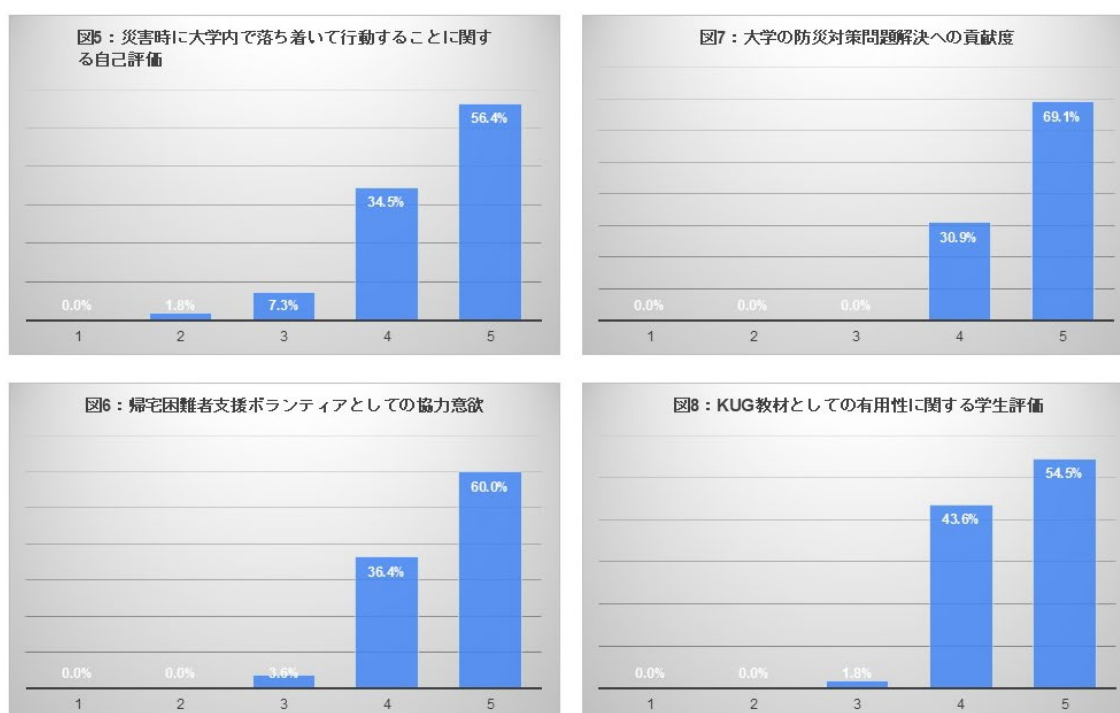


図 5 の「災害時に大学内で落ち着いて行動することに関する自己評価」では、34.5%の学生が「4」、56.4%の学生が「5」と回答した。これらの結果から、授業を受けたことで、90.9%もの学生が災害時に大学内で落ち着いて行動できるようになったと感じていることが推察される。さらに、表 1 に、この授業を受ける前と比べて、災害時に大学内で落ち着いて行動する、あるいは滞留することができるようになった理由を示すとともに、テキストマイニングを用いて抽出された主なキーワードとその出現頻度を図 17 に示した。本授業の履修によって、備蓄品や大学の支援体制、提供される情報や帰宅リスクを具体的に認識することで、大学に留まることの安心感が得られる。また、Stay for Safety の理念から、自らの安全だけでなく周囲にも配慮した行動をとる姿勢、AED の使用や非常用トイレの使い方を実践的に学ぶことで、災害時に役立つスキルを習得できたという実感が述べられていた。このように、「授業で災害時の対応やその後どうなっていくのか詳しく学べたことによってイメージがつくようになった」という回答が見られ、具体的なイメージ

を持つことが行動に繋がる可能性を示唆している。

図6の「帰宅困難者支援ボランティアとしての協力意欲」では、回答者の96.4%が、プログラムを通して災害ボランティアとして協力できるようになったと感じている。図7の「大学の防災対策問題解決への貢献度」では、全ての学生(100%)が、本プログラムが大学の防災対策問題解決に役立つと考えており、特に7割近くが「強くそう思う」と回答している。この結果は、プログラムに対する学生の期待の高さを表している。図8の「KUG教材としての有用性」では、98.1%の学生が、KUG(千代田コンソの各大学の帰宅困難者対策に取り組む教職員や学生向けの教材)が帰宅困難者対策に取り組む人々にとって有益な教材だと考えている。

図9の「KUGの推奨意向」では、全ての学生(100%)がKUGを他者へ推奨する意向を示している。図10の「災害時における学生ボランティア参加意向」では、94.5%の学生が、本プログラムを通して災害時に学生ボランティアとして活動できるという自己評価を抱いている。図11の「避難所における健康維持への関心度」では、96.3%の学生が、本プログラムを通して避難所における健康維持への興味・関心が高まったと認識している。図12の「避難所での栄養・食事への関心度」では、94.5%の学生が、本プログラムを通して避難所での栄養や食事への興味・関心が高まったと認識している。

図13の「防災・災害に関する学習意欲」では、96.3%の学生が本プログラムを通して災害や防災への学習意欲が高まったと認識している。図14の「家族・友人との情報共有意欲」では、全ての学生(100%)が、本プログラムを通して得た知識や情報を家族や友人と共有したいと考えている。図15の「外出時の持ち物変化」では、81.8%の学生が、本プログラムを通して外出時の持ち物が変わったという自己評価を持っている。図16の「防災・災害に関する教養科目の履修意向」では、90.9%の学生が、本プログラムを受講した上で、さらに災害や防災に関する教養科目の意義を再認識した可能性が高い。

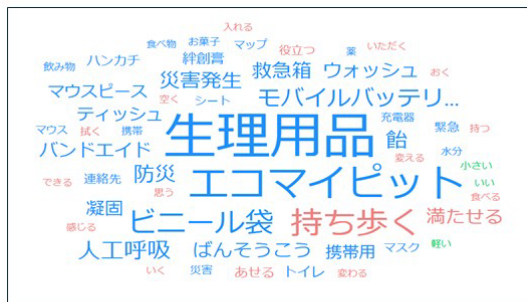
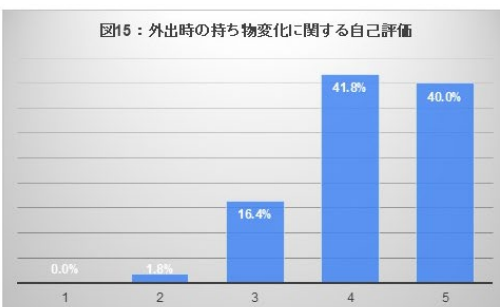
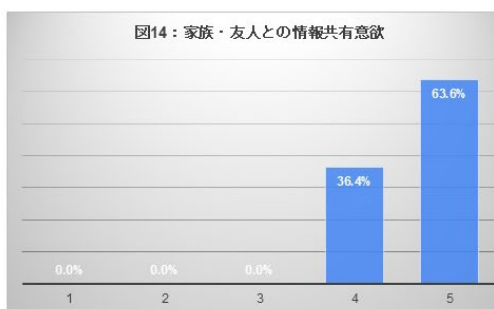
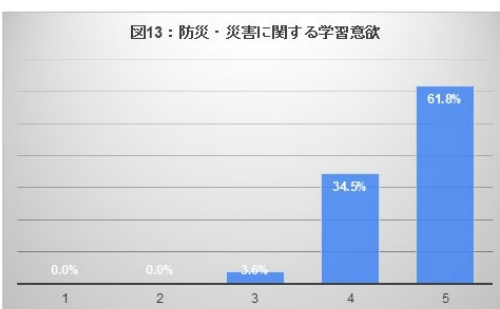
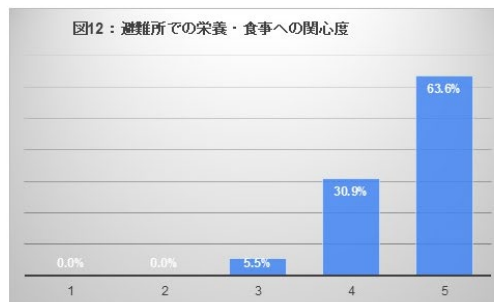
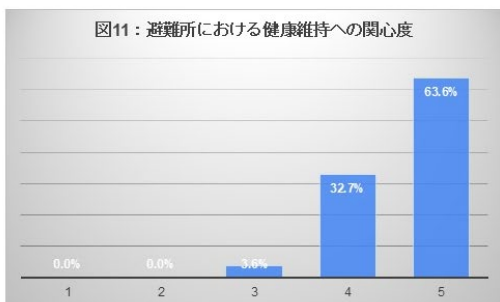
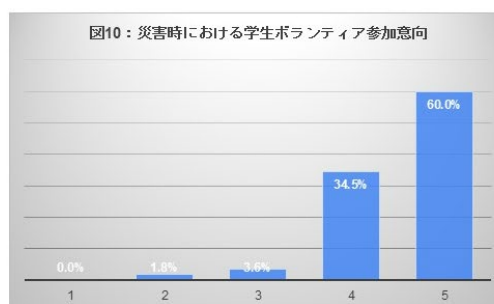
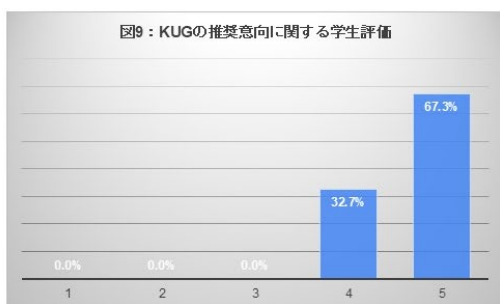
図18の「授業を終え、外出時に持ち歩くようになった物」では、災害時の衛生管理を意識した衛生用品や、精神安定にも繋がる食料品の携行が増加した可能性が高い。また、情報源確保のためのモバイルバッテリーなど、災害情報へのアクセスを重視する傾向もみられた。一方で、意識は高まったものの具体的な準備行動に移せていない学生も存在し、実践的な訓練や行動を促すインセンティブの必要性が示唆された。

以上のことから、これらの防災教育プログラムが大学生の意識と行動に与える影響を多角的に評価した結果から、学生は授業を通して、災害ボランティアとしての協力意欲、大学の防災対策への貢献意欲、KUG教材の有用性に対する肯定的な評価を高めた。また、災害時のボランティアへの参加の意向、避難所における健康・栄養への関心、防災学習に対する意欲も向上したと考えられる。さらに、外出時の持ち物の変化や防災教育に関する教養科目の意義も認識される等の具体的な行動変容と学習意欲の向上が示唆された。研究対象とした授業内容が、防災に関する知識の伝達のみならず、学生の主体的な防災活動を促進する上で重要な役割を果たす可能性を示したと言える。



**表1. 図5.災害時に大学内で落ち着いて行動することに關する自己評価における記述回答一覧（未記入者を除く回答数46名）**

1	この授業を受けたことで災害時に自分には何ができるか、何をすべきかを明確に知ることができたため、落ち着いて行動できるようになったと感じたからです。
2	逃げることで伴う危険も知ったし、大学内には3日間分の備蓄品があると知ったから。また、トイレやAED等身体面についても実習をしてかなり自信がついたため。
3	1人が動くことでみんながつられて動いてしまい、その結果二次災害が起きると知ったことで、落ち着いて行動、滞留することができると思う。
4	この授業を通して、災害が発生すると電車などの交通機関が止まったり道路が通れる状態ではなかったり怪我をしてしまう恐れもあるので無理に家に帰ろうとせず、大学に来た方がいいということを学びました。また大学には学生が3日は寝泊まりできるような備蓄があると知り、焦る必要がないと学んだからです。
5	知識がついて、落ち着いて冷静に動けるようになったと思う。
6	AEDの使い方がったり、非常用のトイレの使用などここに来たお陰で学ぶことができ災害時に活かせるなど感じたことが多くあったから。
7	避難所の運営の大変さを理解したから。
8	私は今回の授業を受けるまで、帰宅困難者というものの定義すら曖昧であった。しかし、3日間の授業を通して、外出している際に災害が発生したときにどのような行動を取るべきなのか、だいたひ明確になった。大学の中に備蓄品があったり、帰宅困難者を受け入れる体制が整えられていたり、災害発生時における大学の役割を強く実感することができたと思う。
9	saty for safteyの精神を学んだから。友達や家族にこのマインドを共有したいです。
10	大学内でどのような行動を取ればいいのか学ばることができたから。
11	対応法や過ごし方、トイレなど様々なことについて学び、実践することができたから
12	この授業を受けて、救急救命の仕方や災害時に個人としてできることなど防災についての知識を身につけることができたから
13	保存食などの物資の置いてある場所を知ったり、AEDの使い方などを認識できたので、多くの学生がそれらの事を知らないため自分は自信を持って他の学生に周知させ、迅速に行動できると感じたから
14	大学内に帰宅困難者になった設定で止まった経験や、災害時に注意すべきことややるべきことなどをしっかり学ぶことができたのが落ち着いて行動できる要因になると思います。
15	自分が落ち着いて行動して大学内に滞留すれば他の人も皆落ち着いて行動してくれらと思うから。
16	今回の授業でどのような心理状態、または行動をとると危険なのか具体的な例やお話から想像することができて同じような状況が本当に起こってしまっても今は心の準備ができていますから
17	地震が起きたらすぐに秋田県の実家になんとか帰ろうとしていたから。宇都宮辺りまで気合い歩いて仙台の友達に迎えに来てもらおうとしていた。3日ほど大学に滞留してから実行することにした。
18	いろんな講義を受けたことによつて、1番皆さんが強調してたことが留まることstay for safetyであり、自分の家が20キロ圏内にはない人は大災害が起きてから3日間は避難施設に待機していないと危ないし、それが個人にもみんなにとっても身の安心を考える上で大事なことから。
19	災害に対する興味が深まったからである。
20	やるべきことがある程度わかったから
21	災害後帰ってはいけないなどどうすればいいかが理解できたから
22	大学でどう行動するかイメージがついたから。
23	自分が実際に宿泊したからこその辛さがわかった。
24	フィールドワークを通し災害時に自分は何ができ、何をすべきかをKUGや他の活動からも学んだからである。また「あなたの待機が誰かを救う」という言葉を聞き待機することでも大切なことだということを学んだから。
25	何をすればいいのかを具体的にイメージできたから
26	滞留するべき理由を理解することができたから。滞留した際のある程度の行動の仕方を体験できたから。
27	授業で災害時の対応やその後どうなっていくのか詳しく学べたことによつてイメージがつくようになったから
28	授業を受ける前は、大学内でどのように行動すればよいかわからなかったのですが、今では備蓄倉庫や千代田区コンソーシアムの内容、KUGの経験、詳細にはエレベーターの中にも備蓄品や普段いすになっているところがトイレ代わりになるなど、様々な災害時対策における発見があったため。
29	災害があるときはむやみに行動せず大学に留まることがよしとされており、その中で避難場所であったり、備蓄倉庫を今回知ることができたため。
30	災害時に必要となる知識や、心理面で意識すべきことを沢山学んだから
31	実際に授業を通して経験したことは忘れない出来事になり災害時に役に立つと思ったから。
32	講義を通じて災害に対する理解が深まり、自分の命を守るためにはどのような行動を取るべきなのかを自分なりに考える事が出来たからである。災害時のリアルな状況や問題を疑似的に体験することで、実際に発生した場合の行動を改めるきっかけとなった。
33	災害発生時の学生に求められる行動を学ぶことができたので、パニックにはしないうと予想したから。
34	どこに備蓄品があるか知ることができ3日分の備蓄用品はしっかりとあることがわかったため。また大学内の方が安全であることが理解出来たため変に移動するよりも大学無いでどとまったほうが安全であると理解出来たから。そして携帯トイレの使い方も学べ一晩泊まったので少しは経験があると考えたため。
35	実際に学校に泊まるという体験被災地での生活をより明確に想像できとても自分に大きな影響を及ぼしました。
36	昨年と合わせ、フィールドワークを行った経験から多少落ち着けると考えた。また、滞留が自分と周りの命を守るためであると学んだため。
37	授業を受けて、自分が待機したほうが周りの安全につながることや、自分にとっても必要最低限の食糧を手に入れられることがわかったから。
38	一斉帰宅によつて引き起こされると予想される状態を考え、大学に残りボランティアとして活動をする方が、自身の安全にとつても身の回りの人の安全にとつても良い選択であると考えられるため。自身が率先して大学に滞留することで、少しでも一斉帰宅を抑制できればと思う。
39	授業を受けなかったら、家から離れた大学にいてもより頑張つて歩いて帰ろうという気持ちになっていたと思う。10kmで2時間半くらいと聞いたが災害時にはたくさんの人が同じことを考えて道を歩くと考え、もっと時間がかかるのではないかと考えた。そう考えると人ごみで体力を奪われたり、雑踏事故に巻き込まれる危険を考えたりすると無理に帰宅するのではなく滞留した方が安全だと感じられたから。
40	シンポジストのstay for safetyについての講義を聞いて、大抵の人は焦つたら混乱して逃げると言う選択を取りがちだが、実際全ての人が動かなければ梨泰院の事件も大勢の人が死なずに済んだということがわかり、冷静な判断をすることが大切なのだとすることがわかった。また、受け入れ役の人をやってみて、高齢者の方、ベツト連れの方などさまざまな人を受け入れていく上で、落ち着いて判断し、滞留しないと周囲の人間のストレスが溜まり不安が高まってしまうのではないかと感じた。そのため落ち着いて滞留することの大切さに気づき、以前と比べて行動が変わつた。
41	災害時に知識不足が故に帰りたい気持ち一心で行動してしまつたり、知らない自分だけでなく周りの危険を呼ぶ行動を起こしかねないと感じ、今回の授業を受けて身につけることができた知識から災害時こそ冷静に行動することの重要性を知つた。
42	以前は学校のどこに滞留するのかや何日分の備蓄がどこにあるのかなど全く知りませんでしたが、具体的なものを知り実際に体験したことによつて安心感や有事の際のイメージは格段と上がったと思います。また、学校に入れば誰かが指示して適当なところに導いてくれるだろうと考えていたところ、自分が先頭に立って物事を決めて行かなければならないことを再認識して落ち着いて行動することが大切だと思ったからです。
43	災害が起つた時まず帰らないということを第一に考えるべきだと知つたから。
44	自分自身の確かな判断をすることができるようになり、それを周りにもちきんと促すことができる知識を得ることができたから。また、それを実践できたから。
45	すぐ帰宅したいという気持ちは分かりますが、リスクをしっかりと考えること、周りにはたらきかけ避難をしっかりと促すことができる人間が少ないと思うため、自分がなろうと思ったからです。
46	シンポジストをはじめとした教授や大人の話を聞いて、災害時に帰宅する行為がどれだけ危険か知る事が出来たから。



### 3) 授業前後の自己認識能力

本授業が、学生の自己認識能力に与える影響を評価する目的で、「力（チカラ）」に関する自己評価に関する①～⑫の項目を授業前後で調べた結果を比較分析した（図 19、図 20）。その結果、以下の項目において肯定的な変化が認められた。

最も顕著な変化が見られたのは、「9.意見の違いや立場の違いを理解する力」であり、「十分にある」と回答した学生が授業前の 19 人から授業後には 25 人に増加（+6 人）した。これは、KUG における多様な背景を持つ学生が各々との協働作業を通じて、他者の視点を理解し、尊重する能力が向上したことを示唆している。また、「10.自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」においても、「十分にある」との回答が 19 人から 25 人に増加（+6 人）しており、災害時という特殊な状況下で、自己と他者、そして社会とのつながりを意識する重要性を認識したことが伺え

図19. 授業前における自己評価による「現在の力」の認識

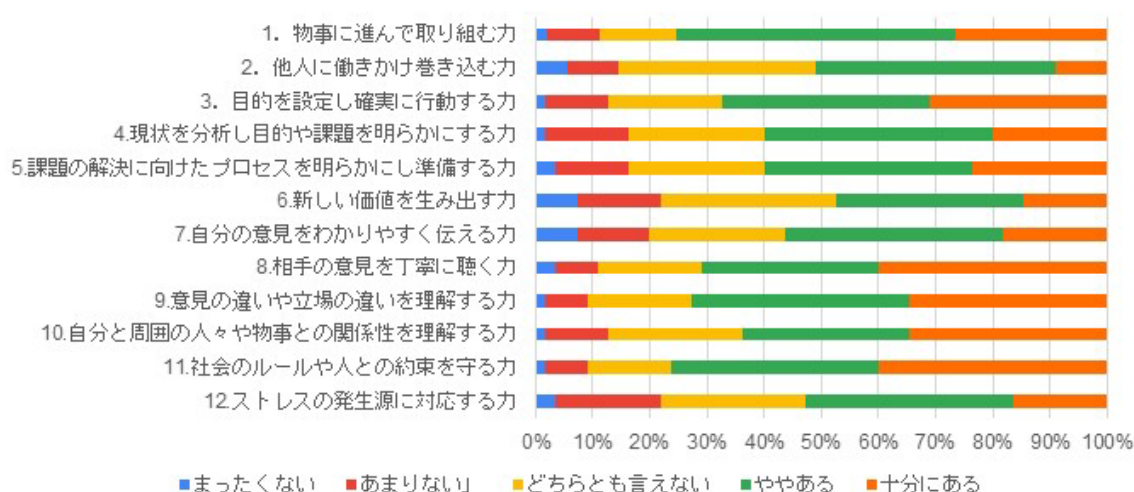
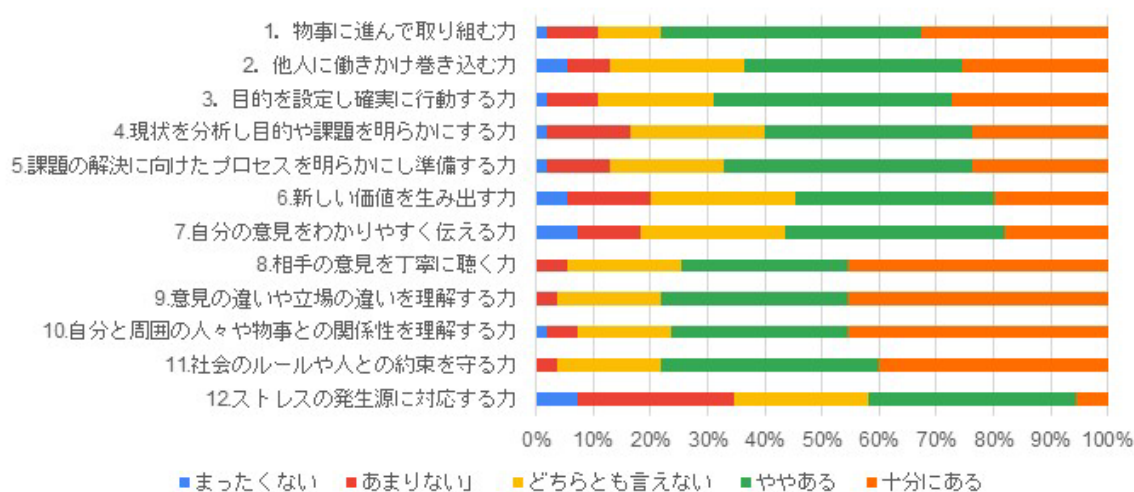


図20. 授業後における自己評価による「現在の力」の認識



る。さらに、「2.他人に働きかけ巻き込む力」に関しても、「十分にある」と回答した学生が5人から14人と大幅に増加(+9人)した。これは、災害時には個人だけでなく、周囲と協力して行動することの重要性を理解し、自ら積極的に働きかけようという意識が高まったことを示唆していると考えられる。一方、「12. ストレスの発生源に対応する力」については、「十分にある」と回答した学生が9人から3人に減少(-6人)しており、興味深い結果となった。これは、プログラムを通して災害時のストレス要因を具体的に認識したことで、自身の対応能力に対する現実的な評価が進んだ結果と考えられる。

これらの結果から、授業において実施した各防災教育プログラムは、学生の共感性、社会性、および自己評価の精度を高める上で一定の効果があつたと言える。ただし、ストレス対応能力については、安易な自己肯定感を抑制し、より客観的な視点から自己の課題を認識するという点で、今後のプログラム設計においては、具体的なストレス軽減方法や相談先の情報提供を充実させることで、課題克服に向けた意欲を喚起する必要がある。

## 5 結論

本授業は単なる知識の伝達にとどまらず、疑似的な帰宅困難者体験や救急救命講習、KUGなどの実践的な演習を通して、大学生が災害時に直面する困難をリアルに体験し、自ら考え、行動する力を養うことを重視した。これは、学生自身が災害への当事者意識を持ち、地域社会に貢献する意欲を高める上で不可欠である。本授業の履修により、学生が大学の災害時の役割や備蓄品の存在を理解し、ボランティア活動への意欲を高めることが期待される。授業前のアンケートでは、大学が帰宅困難者の受け入れ施設であることや、備蓄品の存在・保管場所についての認知度が低いことが明らかになった。学生は、講義や実習を通じて帰宅困難者支援や避難所運営の基本的な知識を習得し、災害時の対応を具体的にイメージできるようになったことが、自由記述の回答からも確認された。特に、備蓄品に関する講義や倉庫の見学を通じて、学生は物資の種類や管理方法を理解し、災害時に的確に対応できる能力を高めた。また、自身が被災する可能性を考慮することで、備蓄品の活用や避難行動への関心が高まり、支援活動に対する積極性が促進されることが示唆された。

本研究の成果は、千代田コンソの各大学と共有し、防災教育の改善のヒントとして各大学の防災教育の推進、ひいては災害に強い千代田区の実現にも貢献することが期待される。今後の課題として、より実践的な演習や訓練を導入し、大学教職員、地域社会、近隣企業の連携を強化することが求められる。また、学生への周知活動を強化し、備蓄品の適切な管理・活用についての理解を深め、円滑な避難所運営に寄与できる人材を育成する必要がある。さらに、大学のウェブサイトやSNSを活用した情報発信、キャンパスマップの配布、宿泊体験型の防災訓練の実施などを通じて、学生が主体的に防災活動へ関与できる環境を整備することが重要である。こうした取り組みを進めることで、災害に強い大学・地域社会の実現に貢献できると考えられる。

## 謝辞

本報告書の対象授業の実施にあたり、多大なご支援を賜りました法政大学総務部庶務課の小林光広課長、詳細な授業記録をご提供くださった法学部の藤岡成美准教授に深謝いたします。また、屋外調理実習に電気自動車をご提供くださった日産自動車株式会社日本事業広報渉外部の高橋雄一郎様、そして貴重なご講演をいただいた多くの先生方に心より感謝申し上げます。皆様のご協力なしには、本授業は成しえませんでした。

## 参考文献

- (1)伊藤マモル (2025)：学生と作る、自然災害に強い大学キャンパス—アクションカードと健康指標を用いた帰宅困難者支援システムの構築—，加盟大学「防災・減災」研究事例集，日本私立大学連盟，3.
- (2) 頼政良太 (2024)：災害ボランティアの探究—アクション・リサーチによる実践研究，関西学院大学出版会
- (3)阪本真由美 (2024)：阪神・淡路大震災から私たちは何を学んだか，慶應義塾大学出版会
- (4)伊藤マモル (2024)：帰宅困難者支援に関する課題解決型授業の取り組み，自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (3) —地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発，73-82.
- (5)伊藤マモル (2024)：帰宅困難者一時滞在施設の受入れに備えたアクションカードの開発，自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (3) —地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発，83-88.
- (6)伊藤マモル (2023)：模擬的な帰宅困難者一時滞在支援施設における一泊二日がストレス関連指標に及ぼす影響，自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (2) —教職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発，36-50.
- (7)伊藤マモル (2023)：法政大学において実施された学生及び教職員によるKUGの報告，自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (2) —教職員及び学生を対象とした帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発，80-94.
- (8)伊藤マモル (2022)：学生及び職員による帰宅困難者支援施設運営ゲーム（モデル校：法政大学）の学習体験，自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究 (1) —学生版 KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の開発，53-67.

### 第3節 大学間防災ネットワークの構築

#### —千代田キャンパスコンソにおける Discord 導入の試み—

谷島貫太（二松学舎大学 文学部）

##### 1 はじめに

千代田区には多数の大学が集積しており、平時には学術・教育活動の拠点として機能しているが、大規模災害時には帰宅困難者の受け入れや物資の供給といった役割を果たすことが求められる。特に千代田区は昼間人口が多く、災害発生時には多くの学生・教職員・地域住民が避難場所を必要とするため、各大学間の迅速かつ的確な情報共有が不可欠である。

しかし、これまで千代田区内の大学間で災害時の対応に関する統一的な情報ネットワークは存在せず、各大学が個別に防災対応を進める形がとられてきた。このため、緊急時に大学間でリアルタイムの情報共有を行う仕組みが不十分であり、連携の遅れが生じるリスクが指摘されていた。たとえば、備蓄物資の相互支援や避難者の受け入れ調整を行う際に、迅速な情報交換が難しいことが課題となっていた。

こうした背景のもと、千代田キャンパスコンソの共同研究チームでは、防災ネットワークの構築を目的とした Discord サーバを立ち上げることを決定した。これは、従来のメールや電話といった手段に比べ、リアルタイムの情報共有が可能であり、迅速な対応を支援するための柔軟なプラットフォームとして期待されている。特に、本学が実施した KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）において、Discord を試験的に活用し、ワークショップの進行・記録・振り返りににおいて有効性が確認されたことが、本導入の契機となった。

本報告では、千代田キャンパスコンソの共同研究チームが設立した Discord サーバについて、その設計、運用状況、成果と課題を整理し、今後の展望を検討する。防災ネットワークの強化に向けた具体的な取り組みを示すことで、より実効性のある大学間連携のあり方を提案することを目的とする。

##### 2 Discord サーバ設立の経緯

千代田区に立地する大学群は、災害発生時に帰宅困難者の受け入れや物資の供給といった対応を求められる。そのため、各大学間での迅速な情報共有と連携が不可欠である。しかし、従来の情報共有手段であるメールや会議、紙ベースの資料では、緊急時の即応性が乏しく、リアルタイムの情報共有が困難であるという課題があった。

加えて、これまでの大学間の防災連携は、各大学が個別に千代田区と協定を結ぶ形式が中心であり、大学同士が直接つながる公式な情報ネットワークは整備されていなかった。本



来であれば、千代田区全体の大学が統一的に活用できる防災ネットワークの構築が望ましいが、そのようなネットワークを立ち上げるには、制度設計や運営体制の整備に時間がかかるため、即座の実現は難しい状況にあった。

そこで、まずは機動力が高く、低コストで始められる情報共有手段として、Discord を活用することを決定した。Discord は、チャットベースのリアルタイム情報共有が可能であり、大学ごとにチャンネルを分けることで、各大学の独自の防災体制を維持しながら、必要な情報を効率的に共有できる点が評価された。また、KUG における試験運用でも、参加者がリアルタイムで情報を交換し、振り返りにも活用できることが確認されたため、その実績を踏まえて本格的に導入する運びとなった。

このように、本来の公式ネットワークの整備には時間がかかるため、まずは大学間の情報共有をスムーズにするための場として Discord を立ち上げ、実際の運用経験を積みながら、今後の防災ネットワークの在り方を検討していくという方針が採用された。

### 3 サーバ設計に際しての予備的検討

本 Discord サーバは、千代田区の大学間における防災ネットワークの基盤として構築された。しかし、公的なネットワークが未整備な現状では、制度的な整備には時間がかかるため、まずは機動力が高く、低コストで運用できる場を確保し、徐々に大学間の防災連携を形成していくことが必要である。そこで、本サーバの設計にあたっては、①緊急時の最低限の情報共有、②KUG を活用したネットワーク形成、③サーバ自体の価値付与の 3 点を軸に検討を行った。

#### 3.1 位置づけ—緊急時の最低限の情報共有

本来であれば、千代田区内の大学間で公的な防災ネットワークが構築されることが望ましい。しかし、そうしたネットワークの整備には時間がかかるため、大災害が発生した際に各大学が即座に状況を共有し、最低限の連携をとれる体制が必要となる。

本サーバは、そのような状況を想定し、「公的なネットワークが確立する前の緊急時の情報共有」を目的として設計された。災害発生時には、各大学の被害状況、避難所の受け入れ状況、物資の供給状態をリアルタイムで共有できる場となることで、協力体制の遅れを防ぐことができる。また、自治体や防災機関との連携を視野に入れつつ、まずは大学同士の情報交換がスムーズに行われることを重視している。

#### 3.2 活用の戦略—KUG を活用したネットワーク形成

本サーバを「緊急時のための場」とするだけでなく、KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の実施時に活用することで、防災ネットワークの形成を促進するという戦略を採

用した。

KUG は各大学で個別に実施されることが多いが、サーバを共通の情報共有ツールとして用いることで、大学間の防災連携が自然に生まれる仕組みを作ることができる。たとえば、KUG 実施時にサーバ内でリアルタイムの議論や判断記録を共有することで、参加者が防災対応のプロセスを整理しやすくなる。また、KUG 終了後も過去の実施記録がサーバ上に蓄積されるため、次回以降の訓練や実際の災害対応に活かすことが可能となる。

このように、KUG の副産物として緩やかな防災ネットワークが形成されていく流れを意図しており、結果的に、千代田区の大学間の防災協力体制が強化されることが期待される。

### 3.3 サーバの価値付与—継続的な利用を促す仕組み

ネットワークの構築には、単にプラットフォームを作るだけでなく、そこに価値を見出してもらい、日常的に活用される場とすることが重要である。防災のためにサーバを作っても、利用されなければ実際の災害時に機能しない。そのため、本サーバは KUG 情報の集積と千代田区の防災関連情報の共有という 2 つの価値を付与し、継続的な利用を促す仕組みを構築することを目指している。

#### 1. KUG に関する情報の蓄積

- 各大学の KUG 実施記録、議論内容、振り返りを蓄積し、次回以降の参考資料とする
- 改善点や新たなアイデアを共有し、KUG の質を向上させる

#### 2. 千代田区の防災関連情報の共有

- 千代田区の防災訓練や災害対応マニュアルを集積し、必要な情報がすぐに参照できるようにする
- 各大学が主催する防災イベントや講習会の情報を共有し、参加を促す

このように、KUG と千代田区の防災情報を蓄積する場としての価値を持たせることで、参加者が日常的に活用しやすい環境を整える。これにより、平時から利用されるサーバとなり、緊急時にも自然に機能するネットワークへと発展することが期待される。

### 3.4 まとめ—運用実績への展開

本 Discord サーバは、緊急時の情報共有の確保、KUG を活用したネットワーク形成、そして日常的な価値の提供という 3 つの視点から設計された。特に、KUG の実施を通じて大学間の防災ネットワークが自然に形成される仕組みを意識し、サーバが単なる情報共有ツールにとどまらず、実際の防災対応に活かされる場として機能することを目指している。

しかし、こうした設計の意図が実際にどの程度機能しているのかは、実運用の中で検証する必要がある。そこで、次章では本サーバの立ち上げ後の運用状況について整理し、どのような成果が得られたのか、また運用上の課題は何かを具体的に考察する。KUG 実施時の活用状況や、大学間での情報共有の実態を振り返りながら、今後のサーバの運用方針についても検討を加えていく。

## 4 サーバの運用実績と課題

本 Discord サーバの運用は、KUG の実施と連動させる形で開始された。サーバの立ち上げ当初、すでに KUG を実施していた法政大学以外の、二松学舎大学、東京家政学院大学、大妻女子大学、専修大学、共立女子大学において、KUG 実施時に Discord を活用する試みが行われた。これは、KUG を通じて防災ネットワークが自然に形成されていく仕組みを実現するための、最初の具体的な運用例となった。

### 4.1 各大学における運用とその特徴

サーバの運用開始にあたっては、まずは使用方法の可能性を探るため、使用のフォーマットを定めず、各大学が自由に活用できる形で進めた。その結果、大学ごとにさまざまな使い方が見られた。多くの大学では、一つのチャンネルに情報を集約する運用を採用し、KUG の進行や振り返りをまとめる場として活用した。一方で、二松学舎大学と大妻女子大学では、チャンネルごとに使い方を分けるという工夫がなされていた。

- 二松学舎大学では、\*\*「連絡用」「写真共有用」「成果振り返り用」\*\*の3つのチャンネルを使い分け、それぞれの用途に応じた情報管理を行った。特に、写真共有用のチャンネルでは、KUG の進行中に参加者が撮影した画像を随時アップロードすることで、記録としての役割を強化する形をとった。
- 大妻女子大学では、「KUG 受け入れ方針・イベント対応」「KUG 振り返り」「補足情報」の3つのチャンネルを活用した。なかでも「KUG 振り返り」チャンネルは、KUG 終了後に各チームごとに振り返りを共有する場として運用され、ワークショップ終了後の議論をさらに発展させる可能性を示していた。従来、KUG の振り返りはその場で口頭で行われることが多かったが、このチャンネルの導入により、KUG の内容を整理し、深掘りする場としての新たな活用方法が生まれた。

このように、各大学の KUG の特性に応じた多様な運用が見られたが、特にチャンネルを細分化した事例では、情報の整理や振り返りの充実度が向上する効果が確認された。

### 4.2 Discord 導入による効果

Discord 導入の効果として、大きく以下の二点を挙げることができる。

#### (1) リアルタイムでの情報共有が可能に

これまで、他大学の KUG については事後に報告を受ける形が主であり、実施中の内容を共有する機会は限られていた。しかし、Discord を導入したことで、KUG に参加していなくてもリアルタイムで進行状況を把握できるようになった。

例えば、専修大学で KUG を実施している際、二松学舎大学の教職員がサーバ上の投稿を通じて、他大学の判断基準や対応の違いを把握することができた。また、二松学舎大学や大妻女子大学では、写真共有やチームごとの振り返りチャンネルを活用したことで、KUG の記録を参照しながら議論が可能となり、従来よりも深い振り返りが促された。

#### (2) KUG の振り返りの集約

大妻女子大学の「KUG 振り返り」チャンネルの運用は、特にワークショップ終了後の議論を整理し、他大学と共有する基盤として機能した。KUG の場では時間的な制約から十分な振り返りができないことも多いが、終了後にチームごとの気づきを整理し、蓄積できることは大きな利点となった。こうした試みが他大学にも波及することで、大学間の KUG の知見を横断的に活用できる可能性が生まれている。

このように、Discord の活用により、KUG のリアルタイム共有が可能になり、振り返りの集約・比較が行いやすくなったことが、導入の大きな成果として挙げられる。

### 4.3 運用上の課題

一方で、運用の中でいくつかの課題も浮かび上がった。

#### (1) 情報の整理方法

各大学が自由な形で運用を行ったため、情報が分散しやすく、特定の知見を後から参照する際に整理が必要なケースがあった。今後は、振り返りのフォーマットを統一するか、情報をタグ付けして検索しやすくする仕組みを整えることが求められる。

#### (2) 実際の災害時の運用の課題

KUG というシミュレーションの枠組みの中では有効に活用できたが、実際の災害発生時にどのように機能するかは未検証である。特に、通信環境の影響や、混乱の中での情報整理の課題について、今後のシミュレーションを通じて検討していく必要がある。

### 4.4 まとめ

本 Discord サーバの運用を通じて、KUG のリアルタイム共有、振り返りの集約、大学間の比較が可能になるといった効果が確認された。特に、KUG に参加していなくても他大学の進行状況を把握できる点や、各大学の知見を蓄積・共有する仕組みとして機能しつ

つある点は、今後の防災ネットワークの発展にとって重要な基盤となる。

一方で、情報整理の課題、実際の災害時の運用に向けた検討といった改善すべき点も明らかになった。

## 5 今後の展望とまとめ

本報告では、千代田キャンパスコンソの共同研究チームが防災ネットワークの基盤として設立した Discord サーバの運用とその可能性について述べてきた。KUG の実施を通じた情報共有の仕組みとして一定の成果を上げた一方で、活用のばらつきや情報整理、実災害時の運用といった課題も明らかになった。

今後の展望として、まず KUG とのさらなる統合を進め、シミュレーションの記録や振り返りを一層効果的に行う仕組みを整えることが求められる。また、大学関係者だけでなく自治体や防災団体との連携を強化し、実際の災害対応に活かせる情報基盤として発展させることも重要である。さらに、実災害時の運用テストを実施し、通信環境や情報整理の課題を検証することで、実効性の高いネットワーク構築を目指す必要がある。

本サーバの運用を通じて、大学間の防災協力体制が徐々に形成されつつある。この取り組みを継続し、サーバの活用方法を改善しながら、より強固な防災ネットワークへと発展させていくことが今後の課題である。

# 第3章

## 帰宅困難者支援施設 運営ゲーム(KUG)の 開発と評価





## 第1節 2024年度の二松学舎大学でのKUGの実施

谷島 貫太（二松学舎大学 文学部）

### 1 はじめに

2024年12月14日（土）、二松学舎大学にてKUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）を実施した。本学では昨年に続いて三回目の実施となる。今年度のKUGは、基本的なフォーマットは前年度を踏襲しつつも、新たな試みとしてDiscordの導入を行った。これは、KUGの実施を単発のワークショップにとどめることなく、継続的な情報共有や災害時のネットワーク形成へと発展させることを目的としている。

具体的には、Discord導入には以下の3つの意図がある。

#### 1. ワークショップの成果をアーカイブ化する場の確保

従来のKUGでは、ワークショップ内での議論や対応の記録が紙や一時的なデジタルツールに分散し、長期的な蓄積が難しかった。Discordを活用することで、各チームの議論や対応内容をテキストベースで記録し、後から振り返ることができるようにした。

#### 2. 千代田区キャンパスコンソ加盟大学との情報共有

本学だけでなく、他の加盟大学でもKUGを実施する機会がある。共通のDiscordサーバを用いることで、各大学の実施経験やノウハウを共有し、相互にフィードバックを行う仕組みを整えることを目指した。

#### 3. 災害時に活用可能な情報ネットワークの形成

KUGの参加者は、実際の災害発生時にも情報共有の担い手となる可能性がある。ワークショップ終了後もDiscordサーバを維持することで、万が一の際に、迅速に情報をやり取りできるネットワークを確保することを意図している。

リアルタイムの情報共有に強みのあるLINEに加え、アーカイブ機能を兼ね備えたDiscordを活用することで、KUGの実施をより価値あるものとすることを目指した。

以下では、本学の文脈に即したKUGの準備過程を整理し、当日の実施内容について詳細に報告する。

### 2 準備

#### 2.1 キットの用意（フロアシート）

KUGの実施にあたっては、KUGキットに加えて、避難施設のレイアウトを示すフロアシートが必要となる。今年度も昨年度と同様に、事前に避難施設の図面をシート化したものを準備した。

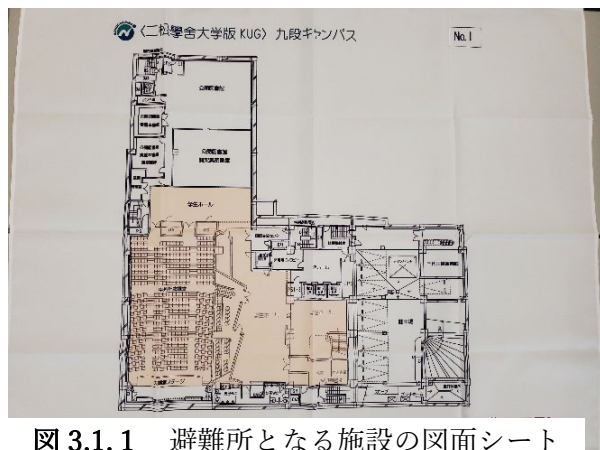


図 3.1.1 避難所となる施設の図面シート

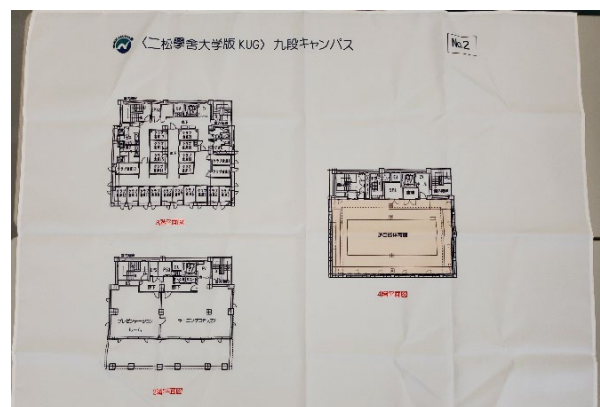


図 3.1.2 避難所となる施設の図面シート

昨年度の KUG では、利用者カードが想定している専有スペースの比率とフロアシートの縮尺に若干のズレが生じる問題があったが、今年度もこの点は完全には解消されなかった。

## 2.2 前提条件の確認（緊急対応マニュアルの確認、備蓄倉庫等）

KUG の目的のひとつとして、災害時におけるマニュアル整備の実践的な検証がある。本学では前年度に続き、学内の緊急対応マニュアルを参照しながら、帰宅困難者の受け入れのプロセスをシミュレーションする形をとった。今年度は学内備蓄の分配計画の具体化を意識し、どの物資がどのように配布されるべきかを、KUG のシナリオ内により詳細に組み込む試みを行ったたとえば、食糧や水の配給方法について、参加者に具体的な判断を求める場面を追加することで、シミュレーションのリアリティを高めた。

## 2.3 KUG のチューニング

KUG の基本フォーマットは昨年度と同様であるが、扱うイベントの順序や内容については、昨年度の経験を踏まえて一部調整を加えた。

また、昨年度はイベントの対応をチームごとに進める形式を取ったが、今年度は個々のメンバーが特定の役割を持ち、分担しながら進行する形に変更した。これにより、参加者全員が積極的に関与しやすくなり、状況把握や意思決定のプロセスがより現実的なものとなった。さらに、対応策の記録方法も見直し、イベントごとの対応内容を即時に記録できるテンプレートを用意することで、振り返りの精度を向上させた。

## 2.4 プログラム組み立て

KUG は図上のシミュレーションであるが、参加者が実際の災害時の状況を具体的に想像できるような演出が重要となる。今年度も昨年同様、LINE のオープンチャット機能を使用して、リアルタイムで災害情報設定を共有していった。また各グループの議論の成果である振り返りボードを Discord 上で共有することで、今回の経験を未来への伝える、という組み立てにした。

## 2.5 参加者募集

今年度の KUG は、単なるワークショップの枠を超え、災害時の対応を担う人材のネットワークを形成する機会としても位置づけた。そのため、昨年度の一般募集に加え、防災ネットワークの構築という観点から、学内のボランティアサークルにも積極的に参加を呼びかけた。災害時に迅速に動ける人材を事前に確保することが、実際の有事においても重要であるとの考えから、こうした学生団体との連携を図ることとした。

また、KUG の成果を学内の実際の災害対応体制に反映させるため、災害発生時の対応を担当する総務課の職員にも参加を依頼した。昨年度は主に学生と教職員が中心の参加構成であったが、今年度は総務課の職員が加わることで、より実践的な視点からのフィードバックを得ることができた。これにより、KUG のシミュレーション結果が学内の防災計画やマニュアルの改善に結びつく可能性が高まった。

このような取り組みの結果、最終的に昨年度の 11 名を上回る 17 名の参加者を確保することができた。参加者の増加に伴い、ワークショップは昨年度の 2 グループ体制から、1 グループ増の 3 グループ編成へと拡大し、より多様な視点からの検討が可能となった。特に、災害対応の経験を持つ職員と、実際に防災活動に関心のある学生が混成チームとして議論を進めることで、具体的に実践的なアイデアが多く出された点が、今年度の KUG の大きな成果のひとつとなった。

## 3 実施

### 3.1. 導入

2024 年 12 月 14 日、二松学舎大学にて KUG が実施された。参加者の内訳は以下のとおりである。

二松学舎大学：職員 4 名、学生 11 名（当日欠席 2 名）

計：15 名

今年度は参加者が増加したこともあり、ワークショップは 3 グループ編成で実施された。

導入説明では、まず帰宅困難者の定義およびその受け入れの意義について、東京都の啓発動画を用いて解説を行った。加えて、千代田区の特徴である昼間人口の多さや、大学と区の間で結ばれている「大規模災害時における協力体制に関する基本協定」について説明し、本学が預かっている備蓄物資の概要を共有した。

また、今年度の KUG の達成目標として、以下の 2 点を掲げた。

- ・災害時に避難所で何が起こるかを具体的にイメージし、正しい危機意識を持つこと。
- ・必要な備えについて考察し、とくに\*\*情報共有体制（IT 活用を含む）\*\*についての具体的な提案を行うこと。

### 3.2 施設見学

導入説明終了後、参加者は 3 グループに分かれ、学内の備蓄倉庫および避難施設の見学を行っ

た。今年度の見学では、記録の蓄積を目的として、積極的に写真を撮影し、Discord にアップロードするよう促した。これにより、KUG 終了後も参加者が施設の状況を振り返ることができるようになった。

最初に備蓄倉庫を訪れた。例年どおり、倉庫内には食料、水、防寒具、簡易トイレなどの物資が保管されていたが、今年度の見学では、学生が昨年度まで誰も気づかなかった新たな動線を発見するという成果があった。具体的には、備蓄倉庫の一角にある扉が、別の建物の裏手へとつながる動線となっていることが判明し、参加者全員でその先のルートを実際に歩いて確認した。この新たな動線の発見は、災害時の物資搬送ルートの改善にもつながる可能性があり、重要な気づきとなった。

次に、避難所に指定されているラウンジスペースへ移動した。机や椅子が多数設置されているため、災害時には家具の移動が課題となることが改めて確認された。さらに、今年度は家具の配置や避難者の導線を考慮したシミュレーションを行うことを意識し、各グループが実際に移動しながら空間の使い方を検討した。避難施設として指定されている体育館は、その日部活動で使用中ではあったが、邪魔にならないように視察させてもらった。



図 3.1.3 施設見学の様子

### 3.3 KUG 実施

施設見学を終えた後、休憩を挟んで KUG 本編に移行した。KUG の進め方についての基本説明を行ったのち、各グループでアイスブレイクを実施し、緊張をほぐしてからシミュレーションを開始した。今年度は参加者が増えたこともあり、昨年度の 2 グループ編成から 3 グループ編成へと拡大した。役割分担の方法については、昨年度と同様にサイコロを使用し、ランダムに担当を決定する形式を採用した。



図 3.1.4 活発な議論の様子

KUG の実施では、前年度と同じく、事前にリスト化されたイベントを順番に処理するのではなく、リアルタイムで LINE のオープンチャットに通知される形とした。これにより、参加者が次に何が起こるかわからない状況を体験し、より臨場感のある判断を求められるようにした。

最終的に、各グループとも 15 個程度のイベントを処理し、災害時の受け入れ方針や運営方法

について多くの議論が交わされた。

### 3.4 振り返りセッション

KUG 終了後、各グループはワークショップの進行を振り返り、受け入れ方針や実施上の課題について議論を行った。各グループの振り返りの要点を以下に整理する。

- ・グループ 1

グループ 1 では、基本方針として男性の受け入れを中心とし、宿泊場所として体育館や学生ホールを活用することを決定した。一方で、女性や子供の待機場所については、より安全な空間が必要であることが議論された。また、避難者の情報収集の重要性が強調され、受付時点で必要な情報を整理する体制の構築が課題として挙げられた。特に、避難者の優先順位をどのように設定するかについて具体的なルールを決める必要があるとの指摘があった。

- ・グループ 2

グループ 2 では、受け入れの条件を明確化し、判断をスムーズにすることの有効性について評価した。具体的には、負傷者の受け入れの可否や、男性・女性のゾーニングを明確にしたことで、混乱を抑えながら運営ができたとの意見が出た。一方で、グループ内での意見調整が難しく、柔軟な対応が求められる場面があったことが課題として挙げられた。また、負傷者の適切な対応策を検討する中で、サポート人員の確保が今後の課題となることが確認された。

- ・グループ 3

グループ 3 では、基本的に一時的な受け入れを原則とし、段階的な対応が必要であるという方針を採用した。特に、受け入れスペースを男女別で区切ることや、負傷者や高齢者を優先して別のエリアに誘導するなどの対応策が具体的に議論された。また、避難者の移動可能性を考慮し、近隣住民や帰宅可能な人を早期に出口付近へ誘導するアイデアも挙げられた。さらに、受け入れ態勢だけでなく、サポート人員の不足が深刻な課題として指摘され、長期的な視点での体制整備の必要性が確認された。



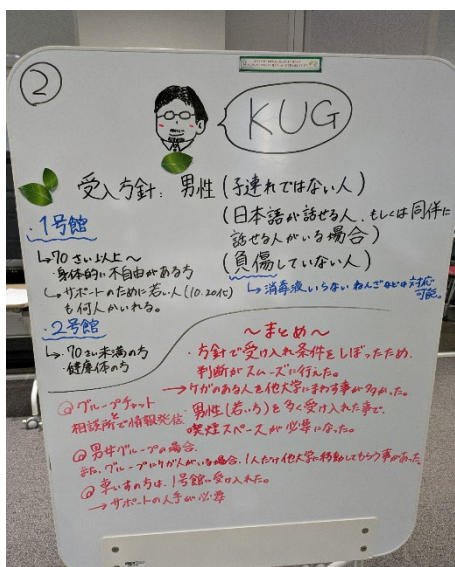


図 3.1.5 振り返りボード

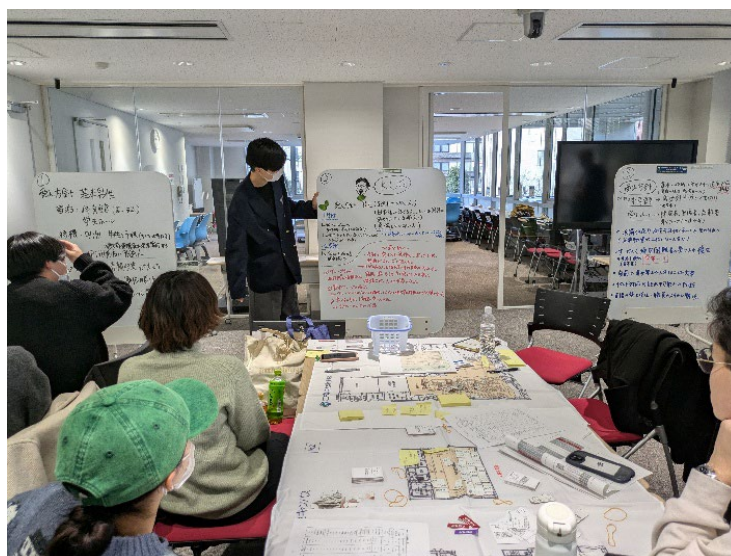


図 3.1.6 発表の様子

#### ・全体のまとめ

各グループの振り返りを通じて、受け入れ基準を明確化することの有効性と、サポート人員の確保という共通課題が浮かび上がった。また、避難所運営における「空間のゾーニング」と「情報収集の重要性」が改めて認識され、実際の災害時に適用できる具体的な手順を今後さらに検討する必要があるとの結論に至った。

この振り返りを踏まえ、次年度以降の KUG では、受け入れ態勢のさらなる最適化と、サポート人員の役割をより具体的にシミュレーションできる仕組みの導入が求められる。

#### 4 まとめ

今年度の KUG は、前年度のフォーマットを踏襲しつつ、いくつかの新たな試みを導入することで、より実践的なシミュレーションへと進化した。特に、参加者の増加による 3 グループ編成の実施や、情報共有の強化を目的とした Discord の活用、そして防災ネットワークの構築を意識したボランティアサークル・総務課職員の参加など、より多角的なアプローチが試みられた点が特徴的であった。

また、施設見学における新たな発見も大きな成果のひとつである。学生が従来気づかなかった備蓄倉庫の動線を発見し、実際に移動経路を確認することで、災害時の物資搬送の可能性を広げる重要な知見が得られた。このような発見があったことは、単なる机上のシミュレーションではなく、実際の環境を確認しながら考えることの重要性を改めて示している。

さらに、KUG 本編では、受け入れ条件の明確化、サポート人員の不足、避難者の情報収集の重要性といった課題が浮き彫りとなった。各グループの振り返りでも、受け入れ方針の明確化により判断がスムーズになった点が評価される一方で、支援体制の構築や人員確保が依然として大きな課題であることが再確認された。



こうした成果を踏まえ、今後の KUG の発展に向けて以下の点が課題として挙げられる。

**1. 防災ネットワークの拡充**

今年度はボランティアサークルや総務課との連携を強化したが、今後はより幅広い層（他大学、地域の防災組織など）との協力を視野に入れる必要がある。

**2. 情報共有体制の継続的な検討**

Discord の活用は一定の成果を上げたが、災害時の通信環境を考慮すると、紙媒体や無線通信など他の手段との併用も検討する必要がある。

**3. 受け入れ・支援体制の強化**

受け入れ条件の明確化は進んだが、サポート人員の不足が依然として課題である。支援体制の強化には、事前のボランティアトレーニングや役割分担の最適化が求められる。

**4. 施設環境の再検討**

今年度の見学で発見された新たな動線を活用するために、物資の配置や搬送ルートの最適化を検討し、次回以降の KUG で実践的に試す機会を設けることが重要である。

**5. 千代田区キャンパスコンソとの連携強化**

KUG の成果を学内だけでなく、千代田区の防災計画に活かすため、コンソ加盟大学間での情報共有の枠組みを強化し、共通のマニュアル改訂につなげることが望まれる。

今年度の KUG を通じて得られた知見を活かし、今後も KUG の枠組みを拡充しながら、より実践的な防災シミュレーションの場として発展させていくことが求められる。今後も継続的な改善を図りながら、KUG の成果を社会全体の防災意識向上に結びつける方策を探っていきたい。

## 第2節 共立女子大学・共立女子短期大学 KUG

深津 謙一郎（共立女子大学 文芸学部）

渡辺 明日香（共立女子短期大学 生活科学科）

### 1 はじめに

昨年度に続き、2024年度は9月19-20日と2月14日に共立版KUGを2回実施した。以下、その意図したところや準備、実施の様子、実施をつうじて得られた成果と今後の課題について、それぞれ報告する。

2024年9月19日（金）-20日（土）実施「いつでも・どこでも共立リーダーシップが発揮できることを目指した体験型 サマーキャンプ」報告

### 2.1 プログラムの目的

大学で災害に直面した際、同じ境遇の人達と共に過ごすにあたり、どのような行動が取れるだろうか。突然の地震災害に遭遇したことを想定し、1泊2日で学内に宿泊し、学内の防災設備や備品の確認、帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）の実施、リーダーシップに関する講座の聴講などを通して、災害時でも自分らしいリーダーシップが発揮できることを目指した体験型サマーキャンプを行った。

今回のサマーキャンプは、令和6年度 千代田学共同提案事業による共同研究「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化に関する研究」と並行して、2024年度 共立女子大学・共立女子短期大学リーダーシップGPの採択課題として実施し、短期大学・生活科学科の学生・教員・助手を対象として宿泊型キャンプを実施した。参加する学生だけでなく、教員・助手についても、ボランティア意識の向上、災害時においてもリーダーシップが発揮できることを目的としてプログラムを計画した。

### 2.2 準備

#### 2.2.1 施設・資材・資料など

実施場所は、共立女子大学・共立女子短期大学神田一ツ橋キャンパス2号館を使用した。宿泊教室場所の選定、校舎内の防災設備やAEDの位置確認、備蓄倉庫見学のルート等について、事前に本学管財課と打ち合わせを行った。

宿泊に必要な寝袋、食事（1日目のおやつ・夕食、2日目の朝食、防災リュック体験用食料）、飲料水、防災用品等を購入した。食事は長期保存のできる非常食を中心に、生活科学科の栄養学を専門とする教員・助手がメニューを策定し、購入品目の選定を行った。

当時、2024年1月1日の能登半島地震の影響で、自治体や企業等、各家庭において、非常食や防災食を備えておくことが推奨されたため、アルファ米や長期保存が可能なレトルト食品の一部に品薄の状況が続いていたため、購入する際に、品切れの商品が複数あり、代

替品を探すのに思わぬ苦勞をした。

## 2.2.2 参加者募集

2024 年 7 月に生活科学科の 1 年生に対して、「基礎ゼミナール」の授業内でプログラムを案内し、20 名から応募があった。当日の参加者は生活科学科 1 年生 20 名、教員 7 名、助手 5 名の計 32 名であった。

## 2.2.3 スケジュール

スケジュールは以下の通りに計画した。

日時		プログラム	場所
1 日目 9 月 19 日 (金)	13:00-14:00	①集合 オープニング・チームビルディング (フラフープを使ったアクティビティ・部屋割り発表)	コミュニケーションギャラリー
	14:00-14:45	②防災ワークショップ：校内オリエンテーリング (防災備蓄倉庫見学、AED の場所確認)	2 号館内
	14:45-15:30	③共立リーダーシップを学ぶ：リーダーシップに関する レクチャーとワーク (リーダーシップ教育センター 湯浅且敏准教授)	オープンプレゼンテーションエリア
	15:45-16:00	④休憩 おやつ	カフェラシュレ
	16:00-17:30	⑤KUG (帰宅困難者支援施設運営ゲーム) の実施	コミュニケーションギャラリー
	17:30-19:30	⑥自由時間 (食事準備・シャワー室の利用可) 学外に出る場合は、19 時までに戻る	地下 更衣室・シャワー室 (女性のみ)
	19:30-21:00	⑦食事：非常食を美味しく工夫して食べる	カフェラシュレ
	21:00-22:00	⑧自由時間 (シャワー室の利用可)	地下 更衣室・シャワー室 (女性のみ)
	22:00	⑨消灯・就寝	女性：5F グループ研修室 男性：6F 606・607 講義室
2 日目 9 月 20 日 (土)	7:00	⑩起床・身支度	女性：5F グループ研修室 男性：6F 606・607 講義室
	8:00-9:00	⑪食事：非常食を美味しく工夫して食べる	カフェラシュレ
	9:00-10:00	⑫防災グッズを用いたワークショップ	オープンプレゼンテーションエリア
	10:00-10:30	⑬キャンプの振り返り (ループリックを活用する)	オープンプレゼンテーションエリア
	10:30-11:00	撤収・片付け	使用した荷物等を本館 613 に運ぶ

## 2.2.4 実施

### ①チームビルディング

9月19日（木）13時に参加者は2号館コミュニケーションギャラリーに集合した。約6名、5つのグループ分けを行い、オープニングの挨拶、並びにチームビルディングのためにフラフープを使ったアクティビティを行った。

### ②防災ワークショップ：校内オリエンテーリング

管財課、警備室の協力を得て、2号館内の防災設備、避難経路、防災備蓄倉庫、警備室の管制モニター等の見学・確認を行った。校内にある防災扉や消火器、火災探知機などの説明を受け、普段見ることのできない防災備蓄倉庫や最新設備の整った管制モニターを案内していただいた。安心・安全に学校生活を送るために、多数の方々や設備等の体制があることを確認する機会を得られたことは、非常に貴重な体験であった。

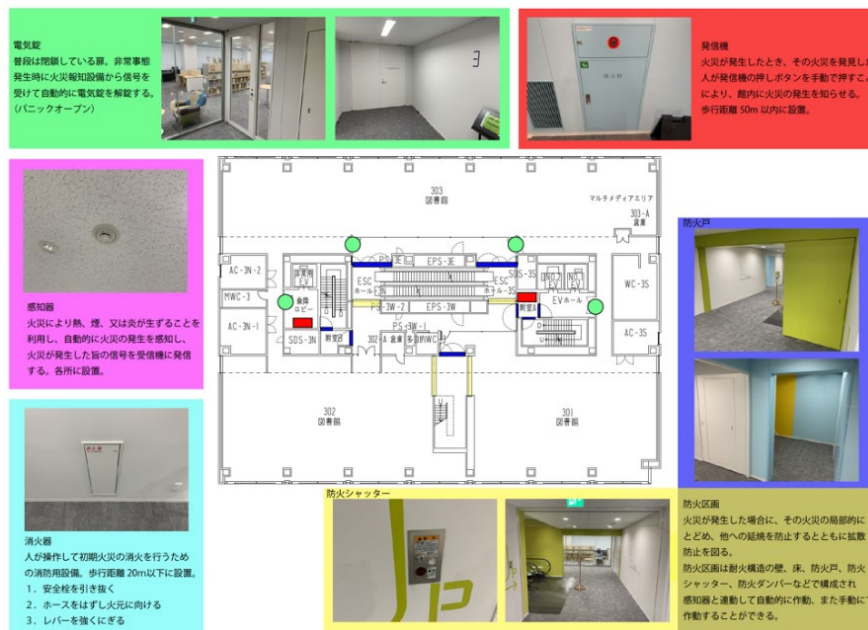


図 3.2.1 校内オリエンテーリングの資料（一部）



写真 3.2.1 防災扉の確認



写真 3.2.2 防災備蓄倉庫

### ③共立リーダーシップを学ぶ

本学リーダーシップ教育センター湯浅且敏准教授の協力のもと、共立リーダーシップに関するレクチャーとワークショップを行った。問題解決に際して、主体的・協働的に取り組める社会的なスキルは、誰にとっても大切で、誰もが高められるリーダーシップ＝権限なきリーダーシップであること。どのように進めたら良いのかを提案し＜目標の設定と共有＞、こうしてみようと進んで行動に繋げて＜率先垂範＞、取り組みやすいよう支援しながら＜相互支援＞、全員が参加しやすい状況・状態にすること＜包容性＞の重要性について解説していただいた。このレクチャーにより、共同活動の目標設定の重要性、活動を終えた後の振り返りが大切であることを学ぶことができた。

### ④帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）の実施

共立女子大学・共立女子短期大学でのKUGの実施は 2023 年 3 月、2023 年 9 月の実施に次いで 3 回目となる。今回は、キャンプ参加者 32 名を 5 つのグループに編成し、1 つのグループの編成は教員 1 名・助手 1 名・学生 4 名の 6 名とした。いずれも KUG は未経験であった。KUG 経験のある研究分担者はファシリテーターを担当した。ゲームに入る前に、研究分担者による KUG の目的と概略及び進行等に関する説明を 20 分程度行った。その後、グループごとに運営側としての役割分担を行い、受け入れ者の選別、場所の区分け、備蓄やトイレスペースの確保などを検討し、グループごとに相談しながら帰宅困難者の受け入れを行なった。次のようなタイムスケジュールで実施した。

- 16 時 KUG の目的と概略及び進行説明（20 分間）
- 16 時 20 分 受け入れ方針・役割分担・受け入れスペースの相談（10 分間）
- 16 時 30 分 ゲーム開始・帰宅困難者の受け入れスタート（40 分間）
- 16 時 50 分 受け入れ者数の確認と共有・イベントへの対応
- 17 時 10 分 施設の閉鎖
- 17 時 10 分 振り返り・グループ発表（20 分間）

今回の KUG では、どのグループも経験者がいなかったことから、ルールの把握や受け入れ方針の立て方、役割分担等の初動がやや難しい部分があったが、帰宅困難者の受け入れをスタートして以降、グループで相談しながら振り分けを進めることができた。ただし、実際に 2 号館で受け入れる場合は、ゲームで実施しているようなすぐ隣に相談ができる人だけで運営を行える距離感ではなく、また、一斉に帰宅困難者が押し寄せた場合に、適切に誘導ができるか等の課題が残った。施設の閉鎖後に、20 分間で KUG を実施してみた感想、反省点、改善すべき点などを付箋にまとめて、グループごとに発表を行い、内容を共有した。

体験した学生からの感想の一部を紹介する。

- KUG を初めてやってみて、はじめ役割分担はしたものの、進行していくうちに、だんだんと自分が今何をすればいいのかがわかり、自分の役割でないものもチーム全体でやっている印象がありました。本番が起こった場合は、今回のゲームよりもより混乱するだろうと感じました。
- 実際に運営側として被害者を受け入れる演習ができた。チーム全員で話し合いをし、試行錯誤するのが楽しかったし、とても考えさせられた。決めるまでは時間がかかったけど、それからはスムーズにそれぞれの役割を全うして取り組めたし、目標を決めて取り組めたのが良かった。
- 役割分担をするときに誰が何をやらいいのか考えて一人一人が自分の役割をしっかりと取り組むことができた。話し合いでも意見をたくさん出すことができた。
- 意見を言いやすいような空気づくりがメンバー全員でできていたことがすごく良かった。実際に口に出して伝えたいことを明確にするということが難しかったが、それぞれがフォローすることで達成することができた。
- KUG で自主的に総括の役割をし、発表までチームをまとめることができたと思う。でも、一人でできることなんてなかったなので人と協力することが大切だと感じた。



写真 3.2.3 KUG 実施の様子



写真 3.2.4 振り返りと発表

#### ⑤食事（非常食を中心とした献立）

1泊2日のキャンプでは、3回（19日のおやつ、19日夕食、20日朝食）の食事を行なった。用意した食品・献立メニューは次の通りである。



表 3.2.1 宿泊型キャンプで用意した食品・飲料水リスト（1人分）

		1人分
19日おやつ	水 いろはす	1本
	ドライフルーツ	1個
19日夕食	尾西の白飯	1個
	無印良品 素材を生かしたカレー バターチキン6代目	1個
	レスキューフーズ ポテトツナサラダ	1個
	サンヨー フルーツみつ豆缶	1個
	伊藤園 1日分の野菜 缶	1個
	水 いろはす	1本
	キリン 生茶	1本
	伊藤園水 ご飯用	1本
20日朝食	その場Deバン プレーン	1個
	KAGOME 野菜たっぷりスープ	1個
	丸善 PROFIT ささみプロテインバー	1個
	大塚製薬 カロリーメイト ロングライフ3年・チョコレート味	1個
	水 いろはす	1本
	キリン 生茶	1本
防災リュック 体験用	尾西の白飯	2個
	無印良品 素材を生かしたカレー キーマカレー	1個
	無印良品 ごはんにかける 八宝菜	1個
	無印良品 ごはんにかける 牛すじとこんにゃくのぼっかけ	1個
	無印良品 野菜を食べる 根菜と押し麦のスープ	1個
	無印良品 野菜を食べる ねばねば野菜と海藻のスープ	1個
	オーサワ 1/2日分の野菜を使った有機ポタージュ(トマト&にんじん)	1個
	井村屋 チョコえいようかん	1個
	【非常食 パスタ 5年保存】 その場deパスタ	1個
	その場Deバン プレーン	1個

19 日のおやつには、長期保存のできるドライフルーツとお茶を配布し、試食を行なった。19 日の夕食は、火を使わずに調理ができるものを選び、電気ポットで湯を沸かし、そのお湯でアルファ米を戻し、ポット内でレトルトカレーを温めてご飯にかけて食した。長期保存ができるポテトサラダ、野菜ジュースで栄養分やビタミンを補給し、デザートとして長期保存可能なフルーツみつ豆を用意した。2 日目の朝は、缶入りのパン、野菜スープ、ささみのプロテインバー、カロリーメイトを用意した。3 回の食事のほか、学校や自宅から避難所へ避難することを想定して、防災リュックに食品や必要な物資を詰めるワークショップ用に、レトルト食品やようかん、レトルトスープ、缶入りパンなどを用意した。



写真 3.2.5 1 日目の夕食の様子

## ⑥宿泊

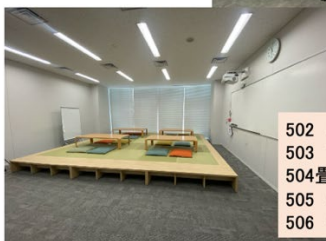
宿泊場所は 2 号館 5F、6F とした。学生は 5F の講義室 2 室に分かれて 10 名ずつとし、女性助手 5 名が 1 室、女性教員 3 名が 1 室に宿泊した。男性教員 3 名は 6F の講義室を用い

た。キャンプ用の市販の寝袋を1人1つ配布し、床に敷いて寝袋に入った状態で就寝した。夜間も照明が使用でき、空調が効いた状況ではあるものの、硬い床で寝ることはなかなか容易ではなかった。室温からすれば、寝袋や毛布は必ずしも必要ではないが、寝袋に包まることで、自分だけのスペースを作ることができ、就寝時の安心面に直結することを実感した。避難生活が長期に及ぶ方々の就寝面での大変さを、たとえ1泊でも経験できたことは非常に大きいことであった。

なお、参加していた学生1名が、19日22時に腹痛を訴えたため、保証人に連絡し、帰宅後直ちに教員に連絡することを伝えた上で、千葉にある自宅への帰宅を認めた。24時少し前に無事に帰宅した電話があり、帰宅を確認した。1泊2日でのキャンプの実施は、病気や怪我のリスクを当然伴う。事前に、参加者に対しては、保証人の承諾書、アレルギーの有無、体調不良の場合は無理に参加をしなくても良いことを伝えるなど、事前に対応可能なことは行ったが、プログラム実施中の参加者の健康状態の観察、いざとなった場合の救急対応などの必要性が浮き彫りになった。

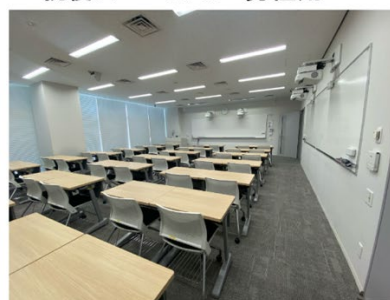
#### 就寝スペース 5F 女性用

21:00-22:00  
自由時間  
シャワー室の利用可  
(女性のみ)  
22:00  
消灯・就寝



502 助手5名  
503 女性教員3名  
504 畳 ゲーム部屋  
505 学生10名  
506 学生10名

#### 就寝スペース 6F 男性用



606 男性教員  
607 予備の部屋

写真 3.2.6 就寝スペース

### ⑦防災グッズを用いたワークショップ

今年度の研究テーマである「被災時に必要とされるライフハック・プロダクトの調査・分析」の一環として、地震災害時に必要となる防災グッズの検証を行うために、体験型のワークショップを実施した。はじめに避難時に必要なプロダクトについての解説を行った上で、市販の防災リュックや防災ポーチを複数用意し、どのような内容物が入っているのかを点検し、実際に手に取って使用することで、機能性や耐久性、使い心地を確認した。

次に、参加者の普段使用しているリュックを持参し、その中に複数の防災グッズを詰めて、実際に背負って歩く体験を行なった。飲料水(2ℓを3本)を入れるとかなりの重量となり、瓦礫の中で避難所まで移動することの難しさを体感した。防災リュックには、多数のグッズが詰め込まれているものの方が便利に感じるが、いざという時にリュックの中から見つけにくかったり、取り出しにくかったりすることがあり、また、ビニールで梱包されているものを1つ1つ剥がす必要などもあり、いつでも持ち運べるような準備があらかじめ必要な

ことも確認できた。市販の防災リュックには、女性用としてピンク色のリュックのものなどがあったが、逆に避難所でピンク色のリュックは狙われやすいのではないかと、いった意見も出た。

自宅以外で地震に遭遇した場合にも慌てないために、最低限の避難グッズをコンパクトに収納した防災ポーチや防災サコッシュを想定し、グループで中に入れるものの選定、封入を行い、気づいた点を意見交換した。防災ポーチは、実際に災害に遭遇したときの備えとして役立つことはもちろん、普段使用しているバッグの中に防災ポーチを常時携帯することで、日頃から災害に対する意識を保ち続けることにも有用である。このことから、ギフトアイテムにして、友人や家族に安心・安全のプレゼントとしたり、キャラクターとのコラボレーションや推しの色の製品を集めた防災ポーチなどに展開したりすることができれば、積極的に防災グッズを身につける習慣を備えることに繋がり、災害対策において重要なアイテムとなることを確認した。



写真 3.2.7 防災プロダクトの解説



写真 3.2.8 防災リュックやポーチの荷詰作業

### ⑧ふりかえり

2 日間のキャンプの内容の振り返りを行った。使用した道具等の撤収を行い、後片付けを行い、解散した。災害時を想定し、非常食を食べてみたり、寝袋で床に寝て一夜を過ごしたりすることで、交友関係を広めたり、教員・助手と学生との距離をさらに縮めることができた。心理的安全性が担保された状態の中で、実体験を通じて防災意識の重要性を認識できたようである。

1 泊 2 日の防災キャンプ全体の感想について、学生のコメントの一部を紹介する。

- KUG の時は、リーダーシップを発揮できなかったけれど、防災グッズを詰め込むときは自分から意見を言えて良かった。お互い色々な意見を出すことができた。
- 意見を言いやすい空気づくりをメンバー全員でできていたことがすごく良かった。実際に口に出して伝えたいことを明確にすることが難しかったが、それぞれがフォローすることで達成することができた。
- 限られた時間でチーム全員が納得したものにするのが難しかったし、誰かに頼る頼ら

れる関係性を築くことや、自分の率先力の無さに気がついた。

- 少しでも自分にできると思ったり、やりたかったりしたら遠慮せずに手を上げていこうと思った。

## 2.3 評価

たとえ災害時でも、学生それぞれが主体的に働きかけ、迅速に避難したり、帰宅困難者の受け入れを円滑に行ったりすることができることを目指して「防災ワークショップ」、「リーダーシップを学ぶレクチャー」、「KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）」、「防災グッズによるライフハック・プロダクトのワークショップ」、「非常食による食事体験」、「教室の床での就寝」等のプログラムを1泊2日で実施した。計画していたプログラムはすべて予定通り実施することができ、参加した学生同士のチームワークも良く、寝食を共にしながらの活動の意義は大きく、当初の目的を達成することができた。

他方、計画段階から、学科の教員・助手が総出となりプログラムを実施・運営することの負担は想像以上に大きく、現在の体制では、毎年恒常的に実施できる計画ではない。幸い、今回のキャンプでは無事に終わることができたが、参加者が深夜に怪我や急病を発症したらどのように対応したら良いか、あるいは、キャンプ中に本当に震災が発生したらどう対処できるのかなどの課題も残った。しかし、KUGや防災グッズの実体験は、本学の教職員・学生全員が関わりを持つべき内容であり、全学で継続的に取り組むことができるプログラムの開発・機会の創出が必要である。

## 3 2025年2月14日（金）実施「南三陸町 海藻ふりかけづくりと、KUG（災害時の帰宅困難者支援施設運営ゲーム）ワークショップ」報告

### 3.1 目的

2月14日に実施した2024年度2回目のKUGで新たに試みたことは、1）KUGの実施前に「南三陸町 海藻ふりかけづくり」ワークショップを行ったこと、2）オンラインコミュニケーションツール（Discord）のコミュニティ「千代田区コンソ防災ネットワーク」内に「共立女子大学 20250214 ワークショップ」のチャンネルを開設したことの2点である。

KUGの実施前に「南三陸町 海藻ふりかけづくり」ワークショップを行った最大の目的は、KUGへの動機付けに関わるものであった。2011年3月11日に発生した東日本大震災では、首都圏内の帰宅困難者が内閣府推計で約515万人発生したとされている（東京都防災ホームページ）。この先、首都直下地震などの大規模自然災害が発生した場合、東日本大震災発生時を上回る帰宅困難者の発生が見込まれる（内閣府防災情報）。しかし現実問題として、東日本大震災の記憶が年々薄らいでいることもあり、首都圏に住む多くの人は災害への備えの必要性は感じながら、それを自分事としては充分捉えきれていないというのが実情ではないかと思われる。

こうした実情をふまえ、KUGの実施前に、災害への備えを自分事として捉えるためのワ